

| 特集 |

COVID-19

罹患後症状

現場の医療者は
どう患者に向き合っているか？

企画 | 片山皓太 | 徳増一樹



の実態

COVID-19の流行から約6年が経過し、入院が必要といった中等症以上の急性期COVID-19患者は初期に比べれば激減し、すでにWHOからパンデミックの終焉も宣言されている。しかし、COVID-19発症後数カ月経っても種々の症状が持続する“COVID-19罹患後症状”は、未だ総合診療の現場で問題となっている。「動くと疲れる」「息が吸いにくい」「頭が痛くて不安がこみあげてくる」「体がだるい」「物事に集中できない」といった何十種類もある症状の多様さと、特異的な治療がないという狭間で、患者に応じたケアの実践が行われている。

本特集では、そのような医療の課題の1つであるCOVID-19罹患後症状を取り上げ、現場の医師・医療者が、どう患者に向き合っているかを紐解いていく。